本年度の同和問題学習を終えて

３年Ｄ組担任　　岡田　隆志

本年度４月板野中学校に赴任して、３年Ｄ組を担任することになった。板野中学の文化的なものをほとんど認識せずして、５月下旬Ｄ組が「全体学習」を実施することになった。全体学習という学年全体で行う同和問題学習が授業として成立するのかという不安を抱きながら、その後道徳・学活・その他の時間において、生徒の同和問題に対する考え方や学校生活での動向を伺いながら、生徒とともに同和問題学習に取り組んだ。やがて教職についてから初めての全体学習を行った。授業開始後、その導入段階で既に意見が飛び交い、その後もほとんど発表がとぎれることなく続いた。終了時点では、３分の２以上の子が発言していて喜ばしい予想外の授業であった。本当に嬉しかった。生徒達が生き生きしていたこと、期待していた以上にがんばってくれたこと、また思い過ごしかもしれないけれど、私のためにもがんばってくれたような気がした。

全体学習を終え、Ｄ組は今後も同和問題学習の授業において、このような活気のある授業様相を呈していけるとともに、その過程でクラス内に温かい雰囲気が醸成されるだろうと思った。しかし、同和問題学習の本質を見極め、それを一人一人が考え実践し自分のものとし、生徒相互の真のコミュニケーションをよくしていくということは、そんなに容易なことではない。道徳や学活の授業が想定したように展開しない日も幾度かあり、ある日生徒から手紙を手渡された。その子の同和問題学習に対すす熱意が感じられた。

考えてみると、私は教職についてから自分の学生時代のこと、家族のこと、友人のことなど、生徒にほとんど語ったことがない。それは板野中学校に勤務してからではなく、１０数年来ずっとである。その要因は自分のキャラクターによるところが大きいと思う。様々なことを考え実践しながら、２学期以降も同和問題学習に取り組んだ。また同和問題に関する文献においては「差別というのは、人の頭の中や心の中で生じるものではなく、世の中のあり方によって差別が存在している。すなわち、社会のしくみに問題がある。」と論述されている。しかし、このように捉えてみても差別をなくするための考え方やその実践方法は明確化されていない。その点、「全体学習」は、そのことを学校教育の中で具体化し、それに至る上での明確な授業実践形態として位置づけられると思う。

本年度の同和問題学習を終えて、各々の生徒の想いを記述する。

＊４月から今までに全体学習を通して、私はいろんな自分に出会った気がする。４月はじめ感情的になっていた自分、ほんまに思うのは雰囲気によっているだけでは一人になったとき絶対に流されるなって思う。全体学習は一つのきっかけだと思う。全体学習をすべてだと思ってはいけないと思う。熱い想いを自分の確かな思いにするには、一歩踏み出す勇気だと思う。それは自分との闘いになってくると思うけど。

＊私は差別を許せない。差別と闘うつもりです。私は部落差別で友達を失うのならそれでもいい。私はずっとうったえていきたい。同和問題学習に取り組んできてよかった。このクラス３Ｄ

のみんなと出会えてよかった。

＊差別をされて流す涙というのは、なくしていかねばなりません。そのために私たちはがんばっているのだと思います。でも、私は全体学習で発表する勇気がありませんでした。でも、発表しないからといって何も考えていないというわけではありません。私は私なりに一生懸命考えているつもりです。

＊全体学習は終わったけれど、これからが大切だと思います。これからも差別をなくすために私はたたかっていく。

＊全体学習がもしなかったら、このような学年全体のきずなもなかったと思います。そして、私も自分のことばかり考えて行動したり、部落差別のことも知らなかったような気がします。板中の全体学習にありがとうを言いたい。この全体学習を忘れることなく、差別への怒りをぶつけていきたいです。

＊全体学習での発表も二回できただけだったように思います。発表しても自分のためになってるのかという気持ちになり、だんだん考え方がかたくなっていきました。差別は地球上に人間が存在するかぎりなくなりはしない。そんなことはわかっていました。一つの差別がなくなっても、また新しい差別が生まれてくる。それでも一つ一つなくしていかなければならないのではないだろうか。僕にとっての同和問題学習はこれからのように思います。

＊私も高校卒業と同時にここをはなれようと思います。でも、私はきっとここへ帰ってきます。でも一年前の私ならきっと二度とここへは帰ってこないような気がする。ずっと誰にも言わずに毎日を過ごしていくと思う。でも今はここに生まれたことを感謝しているからもどってきます。ここが好きだから、家があるから、私の生まれ育ったところだから。

生徒の多様な考え方、熱い想いが上述の言葉に集約されている。全体学習に対する生徒の熱い思い、自分を大切にし仲間を思いやる心。それらを通して、本音を語ることの必要性、支え合いわかり合おうとする心がけの大切さ、固定観念を除去し自己変容していくことの喜びを実感している。ひいてはそのことが意識的にも無意識的にも一人一人の人格を尊重し、尊い命を守っていこうとする意識を芽生えさせ、育成させていくと思う。